

V 日高振興局

1. 重点プロジェクト〔梅産地の競争力強化と労働力確保対策〕

～日高地方クビアカツヤカミキリ連絡会議の開催～

10月12日、クビアカツヤカミキリ連絡会議（事務局：農業水産振興課）は、日高振興局で会議を開催した。新型コロナウイルス感染症の影響により開催は2年ぶりとなり、当日は会員である各市町、JA紀州、日高振興局（当課、林務課、衛生環境課）、うめ研究所に県庁農業環境・鳥獣害対策室を加えた計21名が出席した。

クビアカツヤカミキリは特定外来生物に指定されている害虫で、サクラやモモ、ウメなどのバラ科樹木の内部を激しく食害する。県内では、2019年11月にかつらぎ町で初めて本虫による被害が確認された後、県北部で被害が急速に拡大しており、今後日高地方への侵入が強く懸念されている。

会議では、県北部における現状と被害対策状況と試験研究の取組状況について情報共有するとともに、万一日高地方で本虫の発生が確認された場合に、迅速に被害拡大防止策を講じることができるよう、初動調査の方法及び各所属における担当窓口など詳細な体制について取り決めた。

今後も、継続的にサクラ樹植栽地やうめ園地の巡回調査を行うとともに、各市町やJAの広報紙の活用や防除啓発チラシの配布、マスコミの活用等により、生産者及び一般住民への啓発を行っていく。



連絡会議

2. 重点プロジェクト〔梅産地の競争力強化と労働力確保対策〕

～ウメの葉を吸汁する新害虫「モモヒメヨコバイ」の発生調査～

10月20日、うめ研究所、JA紀州、当課は、うめ主産地であるみなべ町内全域を巡回し、モモヒメヨコバイの発生調査を行った。

モモヒメヨコバイは、モモ、スモモ、ウメなどのバラ科樹木の葉を吸汁する外来の微小害虫である。発生が多くなると激しい吸汁により葉全体が白化し、落葉する場合もあるため、長期的には樹勢や収量への影響が心配される。和歌山県では、2019年に初めて被害が確認された後、急速に分布域を拡大しており、今後のうめ栽培への影響が心配されている。



モモヒメヨコバイ発生調査（みなべ町）

調査では、激しい吸汁被害が認められる地域は一部に限られたものの、ほぼ全域で本虫の発生が確認された。

本虫は周囲の常緑樹で越冬する事例が報告されており、現在目立った被害が認められない園地でも、予期せず被害が拡大する可能性がある。早期発見が防除対策の鍵となるため、今後も継続的にウメ園の巡回調査を行うとともに、研修会の開催や防除啓発チラシの作成・配布等により、生産者への啓発を行っていく。

3. 日高地方生活研究グループ連絡協議会が「日高 味の情報交換」を開催

10月13日、日高地方生活研究グループ連絡協議会（会長：後藤明子氏）が日高川交流センター（日高川町）において「日高 味の情報交換会」を開催した。

新型コロナ対策のため参加人数を制限しての開催となったが、会員に加え紀州日高漁業協同組合女性部と明日を考える会（印南町）からも参加があり、来賓・関係者等合わせて67名が出席した。

これまでは、「味交換会」として、各グループが郷土料理や地元の食材を用いたアイデア料理等を持ち寄って互いに試食し、意見交換や交流を図る形での開催であったが、今回は新型コロナ対策のため、飲食を伴わない形式での開催となった。

まず、「食品加工とネット物販の今後の可能性」と題して、食品加工・販売「CONSERVA」代表の金丸知弘氏による講演があり、金丸氏の東京から田辺市龍神村に移住した経験から、田舎の住みやすさや田舎でのビジネスなどについて話があった。

次に、8つのグループが、それぞれパワーポイントを用いて、郷土料理や地元食材を用いたアイデア料理を紹介した。各料理が考案された背景や調理する際のポイントなどを交え、レシピを共有した。

閉会後には展示直売会が催され、各グループの加工品や農産物の販売を通じ参加者同士が交流や情報交換を行った。

コロナ禍の影響で3年ぶりの開催となったが、グループ会員らは互いに情報発信と交流できたことを喜び、盛況のうちに終えることができた。今後も当課ではグループの活動支援を行っていく。



金丸知弘氏の講演



御坊市生活研究グループによる料理紹介